九州建設情報社

学校キャラバン（出前授業）で福岡第一高等学校の生徒に路面標示体験
建設現場のリアルを学ぶ、進路選択肢のひとつに

路面標示の実演施工に挑戦

建設技術者の高齢化や担い手不足の課題解決を目指し、建設業界と行政が協力して建設業の役割や魅力を伝えるプログラム「学校キャラバン（出前授業）」を６日、福岡第一高等学校建設デザイン科２年生（福岡市南区）を対象に実施された。本プログラムは九州地方整備局と建設産業専門団体九州地区連合会が、平成２９年度より建設業の社会的な役割、ものづくりの素晴らしさを体験できる機会として高等学校を訪問し、生徒、保護者、教員に魅力を発信している。

挨拶に立つ星子支部長

開催にあたって（一社）全国道路標識・標示業九州協会福岡県支部の星子洋満支部長は「普段意識することは少ないが、標識や標示がなければ道路は安全に通行できない」と述べ、日常生活の安全を支える標識・標示の重要性を強調。「皆さんの将来の職業選択肢の一つとして、この分野に興味を持ってほしい」と語った。続けて九州地方整備局の朝崎豊建設産業調整官は、従来の建設産業で抱かれていた「きつい、汚い、危険」という３Ｋのイメージから、「給料がいい、休暇がある、希望がある、かっこいい」という新４Ｋへの転換を進めていると説明。さらに、ＩＣＴ技術の活用や建設キャリアアップシステム（ＣＣＵＳ）の導入など、働きやすい環境づくりが急速に進んでいる現状を紹介。最後に「建設業は地図に残る仕事。人々の命や暮らしを守る使命感とやりがいのある職業」と伝えた。次に、同協会の川畑孝幸事務

局長が協会の活動や建設業許可などを中心に説明。その後、実習室内作業場へ移動し、会員社が「止まれ」などの路面標示の作図、施工作業を行った。路面標示の施工直後にガラスビーズを散布して夜間視認性を確保するなど、日常意識することが少ない道路標示の施工過程に生徒たちは熱心に見入った。

会員社による動画配信で工事の様子を学ぶ

施工を体験した生徒からは「まっすぐラインを引こうとするとずれてしまい、想像以上に難しかった」、「機械が軽くて驚いた、女性でもできる作業だと感じた」などの感想が聞かれた。施工作業の実演が終わった後は、質疑応答タイム。「技術者になるにはどのような勉強が必要か」、「猛暑の時期は屋外作業をどのように行うか」、「施工のデジタル化について」など、生徒や関係者から具体的な質問が出て、業務に対する関心の高さがうかがえた。

同校の乾弘満教諭は、「実際の現場を見る体験は進路選択につながる」と強調。「現場見学や出前授業は貴重な経験。生徒のために今後も続けていきたい」と語った。

熱心に作業を見守る生徒の皆さん